

巻頭言

『病といやし』

編集委員
安黒務

福音主義神学会は、1970年4月に、聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つことを共通の教義とし、教会の健全な成長と発達のために奉仕することを目的として誕生しました。この前提に立って、これまで聖書神学・歴史神学・組織神学・実践神学の諸領域でさまざまな論文が神学会員を中心にして発表されてきました。ここ数年は実践神学の領域のテーマが扱われていきます。神学研鑽の場を建物に例えますと、ひとまず下部構造(支えている部分)の議論を終え、現在のところ上部構造(支えられている部分)の議論がなされているように思います。

今回のテーマに関し、編集委員会での経緯を記すことは読者にとって有益と思います。準備段階当初においては『病をめぐって』でした。『病』そのものではなく、病を“めぐって”という点にポイントがあり、病を“めぐって”現代の事情、身体と心、人間論、癒し等、さまざまな角度から切ってみよう、ということとでした。この関連領域に関し、第16号「生と死」(1985年)と第34号「いのちをめぐって」(2003年)が取り上げられており、日本福音主義神学会の公開サイト <http://www.evangelical-theology.jp/> にて閲覧していただけます。

さて「死」は終わりの重要な出来事なのですが、「病」はもっと人生的、日常的な事柄です。エレミヤ書、哀歌、詩篇などにある「悲しみ、苦しみ」から学び、病气や死などからくる「悲しみ、喪失感、憂鬱」の問題を扱う必要がある

のです。「悲しみの神学」「病の神学」に関する本格的な神学的試みはまだまだ十分に進展していません。「病といやし」といった日常的な事柄が、神学者の間で、なおも馴染みが薄く、歓迎されないままです。その必要を話し合う中で、テーマは最終的に『病といやし』となりました。

その後、編集委員の間で、執筆者の推薦がなされ、旧約聖書分野で南場良文氏「列王記における病と癒し」、新約聖書分野で河野克也氏「マルコ福音書における癒しと救い：物語批評の視点から」、神学と哲学の分野で森田美芽氏「キエールゲゴールと病—『死に至る病』における『自己の病』をどう読むか」、神学と精神医学の分野の実践で二人、笹岡靖氏「信仰者と抑うつ—教会が癒しの共同体となるために」と李光雨氏「聖書を土台とした実践的カウンセリング・ミニストリーの考察」、と実に多彩な分野から五つの論文を書いていただきました。

また、渡辺睦夫氏には「病氣と癒し」に関する文献レポートを執筆していただきました。これは「病といやし」というテーマに関して、掲載論文だけではカバーできないところがありますので、できるだけ広範囲にキリスト教神学書籍に目配りをし、このテーマに関する見取図を示すとともに、今日の神学的状況と動向に関する分析・情報を提供し、注目すべき問題点と主要な争点を指摘し、福音主義諸教会の信念体系の確認とより一層の掘り下げをするための材料としていただくことを目標としました。

また、投稿論文がひとつあり受け入れられました。岡村直樹氏の「教会における人間研究と現象学的アプローチ」では、現象学的アプローチを用いて「米國キリスト教系大学の日本人留学生と伝道」等の分析がなされています。エレミヤ・哀歌にみる孤独や悲しみと留学生のホームシック、その開かれた心に触れる主の恵みは、今回のテーマと共鳴する部分であり、またこの研究はその応用・展開領域を示唆しているのではないのでしょうか。

最後に、組織神学教師のひとりとしての問題意識を申しあげたいと思います。ご存じのように『病をめぐる』問題を神学的に問うことは、大変難しい問いのひとつです。論文は、執筆者が論文の中で一人でおこなうディスカッションとも言えます。ディスカッションは疑問文から始まり、問いの中に暗に答えが前提となっていて含まれています。“正しく問う”ことがディスカッションのはじまりです。続いて、重要な意見の紹介、批判的吟味、答えと導かれていきます。組

織神学の場合、二千年のディスカッションの蓄積となります。ひとつの例を紹介させていただきます。エリクソン著『キリスト教神学』第二巻では、「神のみわざ論」の中の「悪と神の世界」で「悪」の問題の扱い方のひとつ——①問題の性質、②諸種の解決策、③悪の問題を扱うための諸主題——が提示されています。この「悪」の問題の中に「病をめぐる」問題が含まれていますので、その神学的取り扱いにおける幾つかの洞察は「病をめぐる」問題にも援用できるように思います。そして第三巻においては、「キリストのみわざ論」の中の「讀罪の範囲」でからだのいやしとその関連聖句の解釈の問題の扱い方を教えられます。

また『病をめぐる』課題を実際的に扱うことも大変難しい課題であります。それは聖書に根ざし奉仕をしていても現場に近づけば近づくほど、不明瞭な境界線や多様な解釈や実践が生まれてくる場合があるからです。『キリスト教神学』第二巻では、「神の近さと隔たり：内在性と超越性」の中で、神の奇跡的癒しという“超越的側面”と神の一般啓示の一部としての医学の知識や技術を応用する“内在的側面”の両面の捉え方を教えられます。これらの領域においては、何が聖書的であり、何が聖書の外のものであり、何が非聖書的／非キリスト教的なのか、という課題に直面するケースもあります。今年の夏に翻訳させていただきます『ローザンヌ宣教シリーズ No.61 霊の戦い—その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明—』においては、福音主義神学会に内包されている諸議論・諸課題が、①共通の基盤、②懸念される事柄、③意見に相違ある領域、④さらなる調査・研究を要する事柄、の四つの領域に整理され、ガイドラインが提示されています。わたしは、この整理の仕方と示唆されている諸原則は、『病をめぐる』諸課題を実際的に扱う上でも有益なものではないかと思わされています。

J.R.W.ストット著『ローザンヌ誓約—翻訳・解説—』には、「教会が直面する諸問題は、基本的には常に神学的である。それゆえ、教会は神学的に考えることを身につけることによって、キリスト教的原理をすべての状況に適用できるような指導者たちを必要とする」とあります。今回の『病をめぐる』諸論文が読者の皆様の間で、率直な議論、真剣な熟考、実際の奉仕を刺激し、学び活用されることを願っています。